

## 第4章 幼児を理解しよう

### 1 幼児との接し方

#### (1) 明るい笑顔を大切にしよう

幼児を保育する場合、最も大切なことは、いつも明るい笑顔を忘れないことである。教師の笑顔を見た幼児は、親しみを感じ、心をひらく。熱心に接すれば、教師は、幼児にとってよき理解者となり、さらに信頼を深めることになる。

幼児との接し方を身に付けて、幼児に慕われる教師、保護者に信頼される教師になるよう、一つ一つ着実に学んでいこう。

#### (2) 一人一人に合った接し方の工夫

教師の言動や幼児への接し方は、意図的かつ計画的に行うことが大切である。

幼児は、一人一人が異なった性格を持っている。また、育った家庭環境も違う。一人一人に合わせて適切に対応するためには、それぞれの幼児の性格をよく知り、一人一人の違いを十分に把握した上で、接し方を工夫する必要がある。

#### (3) 幼児の自主性を伸ばそう

幼児の自主性を伸ばすことは、大切なことである。そのためには、幼児を集めて指導するだけではなく、幼児が集まって遊んでいる中へ教師が入って、一緒に遊ぶことも大切である。幼児のありのままの姿と生活を大切にしながら、幼児がのびのびと自己実現できるように、幼児の思いや願いなどを理解する。共感するとともに、園生活を見守り、認め、励ますなど、一人一人に応じた援助をしていくことが必要である。また、幼児の心を動かす、魅

力的な環境の構成も大切である。

#### (4) 情緒が安定しない幼児との接し方

幼児は、集団の中で認められたいという気持ちを持っている。これは、幼児の心理としては当然なことだが、その行動の表れ方は、個々の幼児によって異なる。欲求の表れが、いろいろな行動となることを考えて、一人一人の行動を見逃さないように観察することが必要である。その上で、個々の幼児に合った適切な対応の仕方を考えることが大切である。

例えば、入園当初、泣いてばかりいて保育室に入ろうとしない幼児、集団生活に慣れて毎日友達と楽しく遊んでいたのに、ある日、突然泣きはじめて集団の中に入らなくなった幼児がいた場合、この二つの例は、同じように幼児が泣いているが、幼児の欲求の内容は違う。

前者の場合には、その幼児にやさしく接して、早く不安を取り除くような配慮が必要である。ときには手をつないだり、やさしく抱いたりして安心させることも大切である。やさしく遊びに誘い入れて、徐々に新しい環境に慣れるよう援助していく。遊び友達ができると、自然に打ちとけていく。

後者の場合には、集団生活の中で、自分の思いが通らず受け入れてもらえないことが不満で、教師の気を引こうとしていることも考えられる。このような時には、「泣かないで、友達と一緒に遊びましょう。」等と言言葉を掛け、見守った方がよい場合もある。

自己主張の強い幼児には、どのように接すればよいのか。そのような行動の要因をさぐると、

- ・教師の関心を引きたい
- ・家庭の中では、わがママができるが、集団では、それができない

・言葉で、うまく自分の気持ちが伝えられない

等様々である。その幼児がどうして自己主張するのかという要因を考え、その幼児に合った対応を図る必要がある。その際、早く改善しようとあせらずに、長い目で見ることである。まず教師は、幼児に温かく接し、耳を傾けて幼児の思いを聞くように関わる。幼児が集団生活の中では、なかなか思いが通らないことを経験していく中で、友達と対話し、折り合いをつけながら、仲よく遊べることを増やしていくように援助していくことが大切である。

#### (5) 援助の仕方を工夫しよう

入園当初の幼児たちは、不安なため、教師のそばに寄ってくることがある。教師のそばにいてだけで安心してられるからである。しかし友達と遊ぶことなく、いつまでも教師の後ろについていては、自主的、自発的な生活や遊びにならないので、教師のそばから離れて、友達の中に入れるような援助をする。

しかし、無理やり突き放すようなことをすると、よけいに離れられなくなってしまう。そこで、教師の方から離れるようにしむけるよりも、遊ぶことの楽しさを感じることができるよう、友達との関わり合いを深めるようにしていくことも大切である。はじめは、「先生と一緒に遊びましょう。」「つみ木をして遊ぼうね。」などと誘って一緒に遊び、徐々に友達と打ちとけて遊べるようになったところで、そっとそばを離れるようにする。そのうちに、友達と遊ぶ楽しさがわかって、積極的に集団の中に入っていくことが期待される。

幼児一人一人の変容をよく観察し、

適切に判断をした上で、その幼児に対応できるよう、援助の方法についてよく考え、工夫することが大切である。

#### (6) 常に、全体に気を配ろう

教師は、学級全体の幼児に目が届くようにし、活動の内容を把握することが求められる。

自分の近くにいる幼児だけに気をとられることがないように、学級全体の幼児に気を配ることが大切である。常に、「誰が、どこで、何をしているか」をつかんでいることが求められる。

活動が盛り上がらないグループの中に教師が入ることによって、遊びが活発に発展するということもある。しかし、長時間特定の幼児と遊ぶことは、他の幼児に対しての指導が不十分になる可能性も生じる。危ない遊び方をしていることに気付かなかったり、幼児がけがをしたことを他の幼児から言われて、初めて知ったりすることも起こりがちである。

一人一人の幼児の姿に気を配ることを常に心掛ける必要がある。

#### (7) 幼児が、安全にのびのびと遊べるよう気を配ろう

幼児は好奇心旺盛で、物と関わって、遊びを工夫し、発展させていく。例えば、ヒーローごっこ、探検ごっこなどで、園舎の陰、狭い所、高い所などに行って遊んだり、教師が考えもしない遊具の使い方をしたり、自分達の遊ぶ場をつくるために、いろいろな物を運んできて、まわりを囲んでしまったりする姿を、よく見かける。

このように、幼児が遊びをつくり出していく中、教師がどんなに配慮しても保育室や園庭などに危険が生じることがある。幼児が、主体的に、のびのびと活動することは大切だが、大けが

をしたり、生命を失ったりすることがないように全力を尽くすことが求められる。事故を未然に防ぎ、幼児の遊びを深めていくためにも、常に教師は、幼児の動きに注意し、安全面に気を配る必要がある。

## 2 グループ編製の仕方

### (1) 幼児の活動と活動内容との関係

幼児の活動の形態としては、園全体、学級、グループ、個人などがある。いずれの場合も、園全体の協力体制をつくりながら、幼児たちの興味・関心が満たされる援助が必要である。

#### ア 園全体の活動の中で

園全体では、入園式、誕生会、運動会、遠足などの、園生活の節目となる行事がある。形としては園全体の活動だが、実質的には学級が基本的なまとまりとなっていく。

#### イ 学級の活動の中で

学級で紙芝居を見たり、絵を描いたりする場合、形としては学級全体の幼児が、同時に同じ経験をするが、一人一人の発達や経験の程度によって、どのように受けとめ、どのように理解し、どのように表現するのかは異なる。

また、紙芝居づくり、劇遊び、鬼ごっこなどの場合は、グループや個人で活動する。

担任は、それぞれのグループ活動を見守り、必要に応じた援助をする。

#### ウ 年齢による活動の中で

3歳児の活動は、成長過程、習慣や態度の自立など、個性の伸長を重視して指導する必要がある、グループ活動に比べ、個での活動が多くなる。しかし、グループ活動の素地を養うためには、同じ場にいる幼児から刺激を受けていく経験の積み重ねが大切である。

4歳児は、基本的な生活習慣が身に付きつつある（身辺自立）段階である。社会性の点では、まだ自己中心的な段階を脱していないことから、個人活動とグループ活動を徐々に織り交ぜながら活動することが望ましい。

5歳児は、家庭から社会へと認知が移行する段階で、行動範囲が拡大し、仲間を意識し始める時期である。降園後、地域で集団遊びをする機会を確保するのが難しい最近の幼児の現状を考慮すると、グループ活動を意図的に保育に取り入れ、一人一人が自己を発揮できるようにすることが大切である。

### (2) グループの類型にはどのようなものがあるか

#### ア 自然発生的グループと意図的グループ

自然発生的グループとは、幼児が、何らかの活動をする場合、自然に集まってできるグループのことで、意図的グループとは、教師が何らかの活動をさせるために、意図的に分けたグループのことをいう。

一般的に、自然発生的グループは、主として自由遊びの時に、意図的グループは、主として設定保育の時に編制するグループである。

グループを編制する際には、次のことに留意する。

(ア) 幼児が自由に集まる様子を手がかりとして、皆が満足するように、また、活動がよりよく発展するように調整していく。

(イ) グループ分けをした後でも、必要に応じて入れ替えを促す。

(ウ) 徐々に幼児自身でグループづくりができるように援助する。

主体的に活動を発展させていく態度や能力を養うために、あるときは幼児が主になってグループをつくり、あ

るときは教師が主になってグループをつくることが求められる。

#### イ 固定的グループと流動的グループ

固定的グループとは、学級をいくつかのグループに分け、食事の準備・片付け、動植物の世話などを行い、学級全体の生活をよりよいものにするために構成されるものである。

流動的グループとは、集団遊び（鬼遊び、ごっこ遊び、リレーなど）の活動内容や種類によって、メンバー構成やグループの人数を変えることで、より教育効果が得られるようなグループのことを言う。

### (3) 編制の方法はどのようにしたらよいか

今まで述べてきたことをふまえてグループを編制するが、始めは好きな幼児同士を集め、しだいに関わりの少なかった幼児と互いにより刺激を与え合うように改編していくとよい。

活動内容に応じたグループの編制は、経験や活動の種類から共通のイメージが広がり、グループとしての活動になるよう、幼児たちが自主的につくるようにすることが望ましい。

## 3 幼児の行動の理解と対応

### (1) 幼児の行動をよく観察しよう

「先生、お花が咲いているよ。」「先生、ありさんを見つけたよ。」という幼児の言葉に、思わず笑みがこぼれる。

一方で、自分の思い通りにならないとすぐに怒り出してしまったり、話を静かに聞くことができなかつたりする幼児もいる。

幼児の行動を引き起こす心の動きを知ることが、幼児理解につながる。そのためにも、常に幼児の行動に寄り添い、同じ目線で物事を見ることのできる教師でありたい。

### (2) 幼児の行動の背景にあるものを探ろう

「花」や「あり」を見付け、それを教えに来た幼児は、それらへの興味や関心が高いのかもしれない。あるいは、自分が見つけたうれしさや驚きを伝えたいのかもしれない。幼児の行動には、その幼児なりの様々な背景が考えられる。このような幼児の行動の背景を知ることが、幼児理解には重要である。言葉でうまく表現できない幼児の行動の背景を知することは、容易ではないが、とても大切である。

すぐに怒りだしたり、話を静かに聞けなかつたりする幼児の行動には、どのような背景があるのだろうか。その背景として、幼児の生活環境や生育歴によるものや、発達によるものなどが考えられる。次のような理由が考えられる。

- ・注意を引くため
- ・周囲の状況に過度に敏感なため
- ・緊張が高いため
- ・無気力なため
- ・感情のコントロールができないため

このように、幼児の行動の背景は、多種多様であり、幾つかの要素が関連していることが多い。これらを整理し、行動の背景を理解することが大切である。

### (3) 一人一人に合った対応をしよう

同じ行動をしている幼児でも、これまで述べたとおり、その背景は多様である。従って、おのずとその対応も異なる。

幼児の発達には、葛藤や試行錯誤を繰り返しながら、多様な体験をさせることが大切である。適切な対応をしても、幼児の行動がすぐに変容しないことがある。幼児期は、初めての集団生活の中で、自我が芽生え、他者の存在を意識し、自分の欲求を抑制することを覚えるという特性がある。教師は長

期的な視野を持ち、あせらずに承認や称賛を積み重ねることが大切である。

保育は、幼児と教師との信頼関係に支えられて行われる。教師が幼児の変化に気付いて適切に援助することで、幼児は他者から認められる体験を積むことができる。そのことが自信につながり、よりよい行動への原動力になる。

#### (4) 周囲との連携を図ろう

幼児の行動を理解し、適切な対応をするには、周囲との連携が大切である。

##### ア 園内での連携

幼児を育てていくためには、教師同士が協力して、一人一人の実態を捉えることが大切である。教師が相互に様々な幼児に関わり、互いの考え方を話し合い、幼児理解を深められるようにする。話し合うことで様々な視点を得て、専門性を高め合うことができる。日頃から教師同士のコミュニケーションを大切にしておく。

また、園内の組織を積極的に活用することも大切である。会議や研修等で、幼児の行動や対応、環境構成を話題にし、共通理解を図ることで、幼児の成長を支えることができる。

さらに、前年度までの幼児の様子を把握するとともに、今年度の様子を次年度へ引き継ぐ連携も大切である。そのためにも、日々の様子の記録を蓄積しておく。

##### イ 家庭との連携

幼児の生活の基盤は家庭にある。家庭での幼児の様子を知ることが、幼児理解につながる。また、保護者の考えや、養育の仕方を知ることでも重要なので、保護者との会話や連絡の機会をこまめに持つよう工夫する。幼児は保育時間の他は家庭で過ごすので、親子が共に過ごす時間が長い。幼児が、よりよく育つためには、連絡や教育相談の

仕方にも配慮して連携を図る必要がある。（第3章参照）

##### ウ 関係機関との連携

幼児の行動から、発達支援を視野に考えた方がよいと思われる時には、地域の特別支援学校や発達支援センターなどと連携を図り、専門的な立場から支援を受けることも必要になってくる。

また、教育、医療、保健、福祉等関係機関と連携を取り合いながら、幼児へ対応した方がよい場合もある。

どのような連携が必要か、園内はもちろん、保護者ともよく相談し、適切な連携が図れるような配慮が大切である。

なお、保護者と発達支援などについて話をする場合は、園長等とよく相談し、人間関係や信頼を損なわないよう、慎重に行う。

##### エ 小学校との連携・接続

幼稚園・認定こども園は、「義務教育及びその後の教育の基礎を培うもの」（学校教育法）という意識を持ち、幼児教育と小学校教育との円滑な接続のために、小学校と連携を図ることが大切である。

子供同士・教師同士の交流、小学校の教師との意見交換、授業や保育の相互参観を通じて、お互いの教育を理解し合うことができる。また、自分の受け持った幼児の小学校での様子を知することで、自分の指導を振り返ることもできる。特に、就学に向けては、喜びとともに幼児の緊張や不安も高まる。園での行動の様子を「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を通じて共有することや、特に支援が必要な事項について丁寧に引き継いでいくことが、小学校教育との円滑な接続につながる。